もない」というほどに低迷し「光悦会に劣ると云う批評もあり」とのこと。しかもこの年の席持主の中には膝元である東京の数寄者が一人もいないということもあって、関係者は危機感を募らせていたのでした。

そこで白羽の矢が立ったのが、他ならぬ松永耳庵でした。しかし耳庵は、どういうわけか大師会の運営に不満があったようで、一席も持ったことがありませんでした。もとより頑固な耳庵、その心を動かすために政斎は奔走しました。それはまさしく三顧の礼。数人を引き連れて幾度も小田原を訪れ、差し出がましくも道具組のプランまで提案する熱意に、さすがの耳庵も承諾し、曰く「仰木君からアノ手この手と攻立られ、難攻不落を自任した大阪城も、内堀まで埋立ねばならぬ破目になり、トウトウ陥落させられました」と。

そして迎えた当日、満を持しての大師会デビュー。床を飾った掛軸は空海筆「金剛般若経開題残巻」（重要文化財、福岡市美術館蔵・松永コレクション）、それに合わせたのは東大寺二月堂伝来の盆**（出品No.15）**に載る、法隆寺伝来にして原三溪遺愛の水瓶**（出品No.14）**。釜は季節に適した桜文の古芦屋**（出品No.16）**。茶入は戦国武将・松永久秀旧蔵に因む、自身の姓と同じ銘をもつ名物茶入「唐物肩衝茶入 銘松永」（福岡市美術館蔵・松永コレクション）、茶碗は初夏の到来を予感させる高麗の雨漏茶碗**（出品No.17）**を取り合わせました。この耳庵渾身の席は期待通りの大好評を得、政斎は「大師筆から花入と、香合、釜及茶器凡ての取合は、名器揃のみか色調の配合一点の非なく、翁として大奮発の出陣」と、厚い感謝の意を込めて賛辞を送っています。

14 王子形水瓶　※半期展示（前期）

佐波理製　瓶
高さ31.3cm
奈良時代

15 二月堂練行衆盤

蓮仏（生没年不詳）
木胎漆塗　盤
径43.4cm
鎌倉時代・永仁6年（1298）

16 芦屋菊桜地文釜

鋳鉄製　釜
高さ17.7 胴径25.8cm
室町時代

17 高麗雨漏茶碗

陶器　碗
高さ8.7 口径15.4cm
朝鮮王朝時代

出典

仰木政斎著『雲中庵茶会記』戦前・戦中／戦後（影印本、1997年・味岡敏雄発行、非売品）より

- 「小田原松下軒新席開をかね鈍翁忌」（「戦後」、pp.359-361）
- 「東横名宝茶第三次」（「戦後」、pp.459-461）
- 「式守蝸牛翁追善茶　四月一日」（「戦後」、pp.708-712）
- 「大師会茶会」（「戦後」、pp.719-723）

次回展示予告

［古美術企画展示室］
◆夏休みこども美術館2019
「美術のひみつ～昔の美術編」
7月30日（火）- 9月29日（日）
この美術作品は何でできているの？どこから来たの？どういうところが面白いの？そんな秘密をお見せします。学芸員たちが知る、とっておきの秘話もご紹介します。

［松永記念館室］
◆茶人の好み
7月30日（火）- 9月29日（日）
「好み」とは、茶人が創意工夫によって生み出した独自のデザインのことです。本展では、利休、織部、遠州といった茶人たちの「好み」を通して、彼らの美意識や時代の価値観をご紹介します。

福岡市美術館
FUKUOKA ART MUSEUM
〒810-0051　福岡市中央区大濠公園1-6
TEL 092-714-6051（代表）　FAX 092-714-6071
www.fukuoka-art-museum.jp

松永耳庵の茶（まつながじあんちゃ）

会期　2019年5月28日|火|-7月28日|日|
会場　松永記念館室

昭和42年（1967）11月頃の松永耳庵

松永耳庵（1875-1971）、本名は安左エ門（やすざえもん）。戦前は全国の電力会社を次々に吸収合併して「電力王」と謳われ、戦後には多くの反対勢力に屈せずに電力事業の再編成を断行して「電力の鬼」と畏怖されました。結果、日本の経済成長を支える多大な功績を残した偉人は、茶人、古美術蒐集家としても大きな足跡を残しました。

近代数寄者の双璧であった益田鈍翁（どんおう）（1848-1938、本名は孝）、原三溪（さんけい）（1868-1939、本名は富太郎）らに導かれ、「耳庵」と号して茶の湯の世界に足を踏み入れたのは還暦を迎える頃。精力的に茶道具の名品を蒐集しながら、新しく構えた別荘「柳瀬荘」（現埼玉県所沢市。主屋の「黄林閣」は国指定重要文化財）にて茶の湯三昧の日々を送り、瞬く間に高名な茶人となりました。終戦後、蒐集した茶道具の大半は柳瀬荘とともに惜しげもなく国へ寄贈し、神奈川県小田原市に構えた別荘「老欅荘（ろうきょそう）」（現在、国登録有形文化財）に転居します。ここで再び名品の蒐集

を開始し、電力事業再編成を主導する激務の最中にも間隙を縫って茶事を催し、多くの人々をもてなし、喜ばせ、そして自ら愉しんだのでした。

当館に寄贈された松永コレクションの殆どは、耳庵が小田原転居後に蒐集したものです。その頃の耳庵の茶事の様子は、最も親しい茶友の一人であった仰木政斎（1879-1959、本名は政吉）の『雲中庵茶会記』の中に垣間見ることができます。

本展は、政斎が記録した耳庵の茶事・茶会の内容から、当館所蔵の松永コレクションに同定される作品を抽出し、今回は４つの茶席について可能な限りの再現を試みるものです。

［学芸員　後藤　恒］

松下亭（しょうかてい）の席開き―鈍翁追善

昭和28年（1953）12月28日

戦後、小田原に構えた老欅荘は、戦前・戦中を過ごした埼玉の柳瀬荘に比しては頗る簡素な造りで、それは侘茶（わびちゃ）を実践する耳庵が追求した建物でもありました。耳庵はここに独自の趣向をこらした室を増築してゆきますが、昭和28年に主屋の西南隅に新たに設けたのが「松下亭」または「松下軒」とも称される四畳半台目の茶室です。

その記念すべき席開きの日。招客の待合室として用意した大広間の床間には、伝・雪舟筆の大幅**（出品No.1）**が掛かりました。さらに、それに隣する付書院には舎利塔**（出品No.2）**と「藤原時代仏像」が。このように仏教美術で迎えたのには理由がありました。この日は、耳庵を茶の湯の世界に導いた益田鈍翁の命日。そう、耳庵は新席の披露をあえてこの日に選び、鈍翁追善の趣向を凝らしたのです。そして本席においては、鈍翁の命名、箱書になる粉吹茶碗**（出品No.3）**にて自慢の濃茶を振る舞い、それを巡服する招客とともに師への畏敬の念を分かち合ったのでした。

1　山水図

伝・雪舟（1420-1506）
紙本墨画　掛幅装
縦38.0 横86.0cm
室町時代

2　舎利塔

青銅製鍍金　塔
総高40.5
基壇幅24.2×24.2cm
鎌倉時代

3　粉吹茶碗　銘「十石」

陶器　碗
高さ7.8 口径14.7cm
朝鮮王朝時代

畠山即翁との「一騎打ち」

昭和30年（1955）1月23日

東横百貨店内に設けられた三室の茶室にて、東京急行電鉄の事実上の創業者である五島慶太の主催で連日の茶会が開かれ、この日、耳庵は一席を持ちました。別の茶室は畠山即翁（本名は一清）が担当。即翁はポンプの開発と事業化により荏原（えばら）製作所を創業した実業家で、耳庵と親交が深い数寄者でもありました。政斎はこの二室の茶席を「一騎打ち」と表現しました。

伝・光琳筆の梅の絵**（出品No.4）**は季節の適品として申し分なく、利休形の炉縁（ろぶち）**（出品No.5）**、備前の水指**（出品No.6）**、唐津**（出品No.8）**、益田非黙（本名は克徳、鈍翁の弟）作の楽茶碗**（出品No.9）**といった侘びの席を演出しました。対する即翁は、床に「利休の文」、本阿弥宗甫の竹花入、利休所持の信楽水指、雨漏堅手の高麗茶碗という、これも侘びに徹した道具組。この「一騎打ち」を政斎は「永く茶道誌に遺るものと確信」と評しました。

4　金銀泥梅花図

伝・尾形光琳（1658-1716）
紙本金銀泥　掛幅装
縦66.5 横37.6cm
江戸時代

5　木地炉縁

伝・久以（生没年不詳）
木材　炉縁
幅42.4 高さ6.5cm
江戸時代

6　備前矢筈口水指　共蓋

陶器　壺
高17.7 胴径18.2cm
桃山時代

7　黒塗中棗

伝・羽田五郎（生没年不詳）
木胎漆塗　壺
高さ7.3 径7.0cm
桃山時代

8　古唐津茶碗　銘「老鶴」

陶器　碗
高さ8.4 口径14.4cm
桃山時代

9　黒楽茶碗　銘「小太郎ヶ淵」

益田非黙（1852-1903）
陶器　碗
高さ8.1 胴径12.5cm
明治時代

式守蝸牛（しきもりかぎゅう）追善

昭和33年（1958）4月1日

七代・式守蝸牛（1875-1946、本名は宣利）は江戸千家流の茶匠にして香道・御家流の家元で、俳諧、絵画、謡曲等も能くした多才な人物でした。この日は蝸牛の十三回忌で、有志による供養の茶会が護国寺（東京都文京区大塚）境内の各茶室にて催され、耳庵も円成庵（えんじょうあん）（松平不昧を記念するために大正時代に建てられた茶室）にて一席を担いました。

床に掛けたのは「絵因果経断簡」**（出品No.10）**。「絵因果経」とは、経巻を上下二段に区切って下段に経文を、上段には経文に対応する絵を描いたもので、日本では奈良時代以降、中国の原本に倣って制作されました。内容は『過去現在因果経』という、釈尊が過去世に行った修行が因となって現世に成道しえたという仏伝経典になります。

床内には香合として数珠の文様をあしらった沈香箱**（出品No.11）**を添え、釜は荷葉形（ハスの葉の形）、茶入は根来（ねごろ）（和歌山県の根来寺の仏具に由来する漆器）の棗（なつめ）**（出品No.12）**を用いるなど、追善供養に相応しい仏教美術の数々。さらに炉縁は耳庵が蝸牛から譲り受けたもので、この材は妙喜庵（京都の臨済宗寺院。秀吉が利休に建てさせたと伝える茶室「待庵」が現存）に由来する古材を用いたものである旨を政斎は記録しています。

蝸牛と耳庵は同い年で、いかなる親交があったかは記録がなく明らかではありませんが、本席には故人に対する至上の敬意が感じられます。茶の湯においては師弟のような関係ではなかったかと想像されます。

10　絵因果経断簡

紙本着色　掛幅装
縦27.8 横57.2cm
鎌倉時代

11　珠数蒔絵八角沈箱

木胎漆塗　箱
高さ8.3 径13.5cm
南北朝時代

12　根来薬器

木胎漆塗　壺
高さ8.5 径8.8cm
南北朝時代

13　志野矢筈口水指　銘「末広」

陶器　壺
高さ20.0 口径19.0cm
桃山時代

満を持しての大師会（だいしかい）デビュー

昭和33年（1958）4月21日

「大師会」は、益田鈍翁が明治28年（1895）、弘法大師空海筆の「崔子玉座右銘」を披露する茶会を、空海の命日に品川の自邸で開いたことに起源します。その後、関東の財界の数寄者たちが中心となって毎年持ち回りで茶会を開くようになり、西の光悦会とともに代表的な大寄せ茶会として知られます。

仰木政斎によると、その頃の大師会は「席持主の階級低下」により「有力な席持となると五指を屈する程